

特集：イチモンジセセリの発生予察法の改善

被害解析

群馬県農業試験場 せん ほん ぎ いち お
千 本 木 市 夫

はじめに

イチモンジセセリ（イネツトムシ、*Parnara guttata*）は群馬県ではハマキムシ、ハマクリともいわれ、古くから重要なイネの茎葉害虫として扱われていた。越冬については、わずかながら可能性（高橋，1995）があるが、ほとんどは主に県外の温暖地から成虫の飛来・侵入により多発生し、第2世代幼虫によって突発的に著しい被害を招く場合もある。このため、飛来の多少にかかわらず慣行的に薬剤防除が行われているのが現状である。

イチモンジセセリについては本誌で10年前に特集を組んでおり、被害解析についても、吉沢（1996）が紹介している。筆者らも、1997～2000年度に実施された植物防疫課の「イチモンジセセリ発生予察方法の改善に関する特殊調査事業」に参画して、この害虫の発生時期、発生量、被害解析および越冬調査等を行った。

ここでは被害解析を中心に、今までの成果の概要を含めて紹介したい。なお、有益な助言をいただいた独立行政法人農業生物資源研究所 平井一男博士および埼玉県農林総合研究センター 江村 薫氏に謝意を表す。また、神奈川農業総合研究所 原 聖樹氏、長野県農業総合試験場農事試験場 吉沢栄治氏、桑澤久仁厚氏には貴重な文献資料の提供をいただき、謝意を表す。

I イネの移植時期と発生

移植時期別における本種の苞数^{ほうすう}および幼虫・蛹数の発生量を知るため、群馬県農業試験場東部支場（館林市）において、品種‘あさひの夢’を供試、栽植密度30×15 cm、中苗植え、移植時期を2000年5月31日、6月7日、6月15日、6月23日植えの調査区を設置して、7～8月の間、水田内の100株当たりの苞数および幼虫・蛹数を約10日ごとに調査した。

第2世代幼虫の発生時期は平年よりやや早く、発生量は平年よりやや多い発生であった。7～8月は高温に経

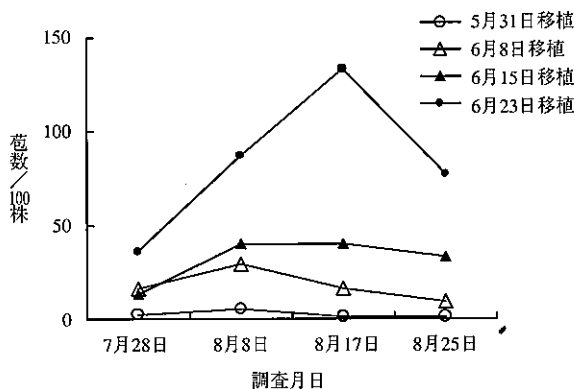


図-1 移植時期と苞数（千本木・藍澤，2001，改変）

過したことが影響したものと考えられる。

移植時期別による第2世代幼虫による苞数の発生は、6月中旬移植までは少なく、6月下旬移植で最も発生が多かった（図-1）。

移植時期別では移植が遅くなるほど発生が多くなることが認められ、江村・村上（1989）、呉羽（1972）も同様の結果を示している。また、この事業の中でも埼玉県1997～2000年度、長野県2000年度、兵庫県1997～99年度でも同様な結果が示された。

北関東を中心にイネ・ムギの二毛作地帯では、ムギ類の収穫時期や水利の関係で、移植時期を早めることができず、移植時期が6月中旬以降になってしまうので、本種の被害が大きい。ただし、西日本では二毛作が少ないことや台風の影響もあって、6月下旬移植が少なく、本種の第2世代幼虫の被害もあまり問題にならないようである。

II イネの品種と発生

品種別における本種の苞数および幼虫・蛹数の発生量を知るため、群馬県農業試験場（前橋市）および東部支場において、4品種を供試して、移植2000年6月23日、栽植密度30×15 cmに中苗植えし、移植時期別調査と同様に調査した。

6月下旬移植における品種別の第2世代幼虫による苞数の発生状況は農試、東部支場とも短稈品種の‘朝の光’で発生が多くなる傾向が認められ（図-2）、倒伏しやす

Yield loss analysis by the rice skippers, *Parnara guttata* (BREMER et GREY). By Ichio SENBONGI

（キーワード：イチモンジセセリ，被害解析，発生予察，要防除密度）